

# ぼくのワトソン君



story by aono

photo by michiko

## ワトソン君がやってきた

---

東京では珍しく明け方に雪が降った日、ぼくのママが可愛がっていたビーグルのアガサが死んだ。

十五歳だった。ぼくは十二歳だから、アガサとママとの付き合いは、ぼくより長い。

「もう、犬は飼わない」ママはそう宣言した。

一週間も泣いているママの目は、はれてふくらんでいる。

ぼくもアガサが嫌いではなかったけど、ぼくをばかにしているのがあまりにも明らかなので、ママほど悲しめなかった。

「冷たい子ね」とママは言うけど、「ママがかわいがり過ぎてるんだ」とぼくは心の中で言い返している。

犬で十五歳なんて長生きの方だ。人間で言えば八十歳、もしかすると九十歳近いかもしれない。

アガサがいなくなって半年程経ったころ、ぼくが学校から帰ると、ママが食卓に肘を着いて何か考えていた。

「どうしたの？ ママ」

「あのね、獣医さんから電話があって」

ぼくは嫌な予感がした。

「まさか、ママ……」

そう、そのまさかだった。

「かわいいビーグルの子犬がいるらしいのよ」

「ママ、もう犬は飼わないと言わなかったっけ？」ぼくの声はママには聞こえなかったらしい。

「でね、明日にでも連れてくるらしいけど」

「明日？」ぼくは大声を出した。

「洋君もううれしいでしょう？」

ママがぼくの事を呼び捨てではなく、洋君と呼ぶ時は要注意だ。

「ぼくは別に……」何を言っても、ママの耳には入らないらしい。

「パパは良いつて言ってる？」ぼくはかすかな望みをもって、抵抗を試みた。

「もちろんよ、パパだって犬が好きなんだから。それにママが飼いたいと言えば、反対する訳ないわ」

ぼくは塾用の鞆をつかむと、「行って来ます」と言って家を出た。

犬を飼う事について、ぼくの意見は全く求められていない。

散歩をさせるのはぼくなのに。おまけにママの頭の中は新しい犬で一杯で、ぼくのおやつを忘れてしまったらしい。

しょうがない、途中でマックにでも寄って行くか。

今日みたいに暑い日は、シェークも飲みたいしね。

次の日、家の玄関をあけると、電話に向かって怒鳴っているママの大きな声が聞こえた。

「あんな犬はいらないわ！ 雑種じゃないの！」

雑種じゃだめなのかな？ ぼくは不思議に思った。

「じゃあ、その時は引き取ってもらいますからね！」

そう言うとママはがちゃんと受話器をおいた。

『物を乱暴に扱ってははいけません』とは、たしかママの口癖だよな。



居間では、子犬がバスケットの中で眠っていた。さすがに可愛い。

「この犬だね！」ぼくはそっと頭をなでた。

「でもね、鼻の頭を見てごらん」

「鼻の頭？」

「黒と白のぶちになってるでしょう？ 普通は真っ黒の筈なんだけど」

「ぶちだとまずいの？」ぼくにはよくわからない。

「雑種じゃないかしら」

「雑種でもぼくはいいけど」

「雑種を買った訳じゃないのよ。獣医さんの話では、大きくなれば黒くなるそうだから、しばらく様子を見るわ」

「もし、黒くならなかったらどうするの？」

「半年たっても黒くならなかったら、取り替えてくれるって」

『げ！ それってひどいんじゃないかな』ぼくにはママの神経がわからない。

もちろん、声に出しては言わないけどね。

結局、鼻の頭が真っ黒になるのに一年かかり、やっと我が家の犬として認定されたんだ。

その夜、パパが帰宅してから、犬の名前を考える事になった。

「名前は洋につけさせたらどうだろう」

ネクタイをはずしながら、パパはママの顔を見た。

ぼくはその言葉を聞いて、内心うれしかったけど、ママがきっと反対するだろうと思った。

「そうね、洋も弟ができてうれしいでしょう」

意外なママの言葉だった。

「え？ ぼくがつけてもいいの？」

「いいわよ、ちゃんとかわいがってね」

その時は、ママの顔が天使のように見えたよ。

ぼくが名前をつけるとなると、責任重大だ。子犬の顔をながめながら、あれこれと考えた。

『ジョン』 平凡だ。

『タロー』 ビーグルには似合わないな。

『キング』 シェパードならいいかもしれない。

『ホームズ』

　　そうだ！

『ホームズ』 がびったりだ。

　　賢そうに聞こえるし、これにしよう。

「パパ、ホームズっていう名前はどうか？」

「ホームズね。洋がよければいいよ」

「洋がワトソンっていうわけね」とママが口をはさんだ。

　　ぼくがワトソンだって？　じょうだんじゃない。ぼくがホームズさ。

「犬の名前をワトソンにする」ぼくは訂正した。パパとママは大笑いをした。

「はいはい。ワトソン君ね」

ママは子犬に向かって、「君の名前はワトソン君よ」と言い聞かせている。

こうしてワトソン君は、ぼくの弟となった。

ワトソン君が家族の一員となって、我が家の様子は一変した。

アガサは老犬だったから、動作ものんびりとしていて、ぼくをバカにしている事以外、困る事は何もなかった。

ワトソン君は違った。トイレのしつけからはじめなくてはいけない。毎日、一回はママの叫び声が聞こえる。

「ワトソン君にやられたわ！」

ママの新しい靴をかじってだいなしにしたり、そそうをしたりと、忙しい。

ワトソン君が五ヶ月になると、そろそろ室内から、庭の犬小屋へと移す時期になる。

パパがワトソン君のために新しい犬小屋を用意してくれた。

「古い犬小屋はアガサの臭いがついているからね。小屋の中に洋のいらなくなったTシャツを敷いてあげよう。少し安心するかもしれないよ」

　　はじめて庭の小屋に入れられた夜、ワトソン君の悲しそうな泣き声が何時間も聞こえていた。

「クーン、クーン。キャン、キャン」

　　ぼくはかわいそうになったが、ママは「最初がかんじん」と言って動じなかった。

　　何日かすると、新しい環境に慣れたのか、あきらめたのか、ワトソン君はさわがなくなった。

　　ぼくもママも、やっと 平和に眠れるようになった。

## ワトソン君とカエル

---

ワトソン君が来てから、ぼくの生活も少し変わった。

朝、早く起きてワトソン君を散歩させるのがぼくの役目になった。

毎日散歩していると、顔なじみの犬もできてくる。

白いラブラトル・レトリバーのマイクとも仲良くなった。おとなしく友好的な犬で、ワトソン君もマイクには気をゆるしているようだ。

春休みに入り、あと二ヶ月もすればワトソン君も一才の誕生日を迎える頃、いつものように川沿いの道を散歩していると、マイクに出会った。

マイクを連れている中学生位の女の子が、今にも泣きそうな声で携帯電話をかけている。

「マイクがね、泡を吹いてるの。腰を抜かしたみたいに座りこんじゃって……」

ぼくはそばへ寄ってみた。たしかに口の周りに泡が沢山着いている。しかも立つこともできないようだ。

「迎えに来て」と女の子は携帯電話でたのんでいた。

「どうしたの？」ぼくが聞くと、

「草むらに鼻をつっこんでいると思ったら、急に泡を吹いて腰抜かしちゃって……」女の子はマイクのそばに腰をかがめると、そっと頭をなでた。

「病気じゃないよね？ 大丈夫だよ？ お母さんが来るまで迎えに来てくれるからね」と話しかけている。

「草むらで何かなめてなかったかな？」

「何かって？」女の子は驚いたように聞いた。

「カエルとかさ」

「カエル？ そう言えば、大きなカエルは見たけど、なめたかどうか分からない」

「きっと、そのせいだよ」とぼくたちが話をしている時、白い車が横に泊まった。

「あ、お母さん！」女の子はほっとした声を出した。

「マイクは？」お母さんと呼ばれた女の人は、心配そうに車から降りて来た。

マイクはもう泡を吹いていなかった。

「一体どうしたのかしらね」女の人はマイクの頭を撫でた。

「この子がカエルをなめたんじゃないかって」

『おいおい、この子はないだろ？ たいして年は違わないじゃないか』と思ったが、声に出しては「たぶん、そうだと思うんですけど」と答えた。

「カエル？ なめるとこうなるの？」

「ええ。カエルは身を守るために皮膚から毒を出すんです」

「まさか、そんなこと聞いた事ないわ。エミ、マイクを車に乗せるから手伝って」

「もうすぐ、歩けるようになりますよ。カエルの毒はそう長くは効いてないから」ぼくは一応教えておいた。女の子が信じたとは思えなかったけど。

エミと呼ばれた女の子は、すまなそうにぼくを見た。ぼくは、ワトソン君を連れて、その場から離れた。

マイクが何故カエルをなめたと分かったかと言うと、実はワトソン君が一週間程前に同じ経験をしたからなんだ。

エミさんのお母さんにした話は獣医さんの受け売りだ。



庭で泡を吹いていたワトソン君を見て、ママは慌てて獣医さんと呼んだ。

獣医さんが到着する前に、ワトソン君は元気になっていた。

「カエルでもなめたんでしょう」獣医さんはこともなげにそう言った。

ママはさっきの女の人と同じように「まさか、そんなこと聞いた事ないわ」と答えた。世の中の母親と言うのは、自分の知っている事だけが正しいと思っているのさ。

ぼくは獣医さんを信じた。庭に大きなカエルがいるのは知っていたし、ワトソン君ならカエルを見て、好奇心からきつとなめるに違いない。

二、三日後、マイクを連れたエミさんに出会った。

エミさんは、ぼくを見ると大きく手を振った。

「この間にごめん。あの後、獣医さんに聞いたらやっぱりカエルじゃないかって言われた。君は良く知ってるんだね」

ぼくはワトソン君が同じ経験をしたことは黙っている事にした。

「たまたま知ってただけだよ」

マイクとワトソン君と一緒に歩き出したので、ぼく達も自然に肩を並べる事になった。と言っても、エミさんはぼくより十センチ程背が高いから、話す時は見上げる形になる。

横幅もぼくよりかなりある。

春休みの間、毎朝ぼくたちは一緒に散歩をした。ステキな春休みだったが、事件は学校の始まる前日に起った。

## ワトソン君が消えた

---

明日から学校が始まるという日、朝ワトソン君を散歩させた後、ぼくは友だちの勇の家へ遊びに出かけた。

ぼくとしては、ワトソン君を犬小屋にしっかりつないだつもりだった。「新しいゲームとマンガがあるぞ」という勇の言葉に、気がせいっていたのかもしれない。

家をとびだしたとたん、ワトソン君のことは忘れていた。

ゲームは想像していた以上に面白かった。「近ごろのヒットだね」ぼくたちは生意気にも批評した。

「そ、この頃面白くないやつばっかだったもんね」

二人でゲームに夢中になっていると、あっという間に昼になった。

今日はママもパートの仕事がある日だ。家に帰っても昼飯はない。ぼくは勇と一緒にコンビニへおにぎりを買いに行く事にした。

ポケットに入っているお金を確かめてから、おにぎり二つとからあげを選んだ。飲み物も買うと、お金の残りは殆どない。

いつも散歩する川沿いの公園のベンチに座って、勇とおにぎりをかじっていると、エミさんが通りかかった。

ぼくは軽く頭を下げて挨拶をした。

「こんにちは」 エミさんはぼくを見て手をふった。

勇の目が気になって、ぼくは手を振り返さなかった。 エミさんはにこっと笑うと公園を横切って出て行った。

「知り合い？」勇がからかうように聞いた。

「うん、まあね」

勇はニヤッと笑った。

「そんなんじゃないよ！」ぼくがむきになって否定すると、

「な〜んも言ってないぜ」とまたニヤッと笑った。

ぼくは勢いよくベンチから立ち上がると、塾の前にマンガ読み終わらないと」と勇をせかした。

「そうだな、家に戻るか」 エミさんの事をそれ以上つこまれなかったので、ぼくはほっとした。

勇の家で時間をとりすぎて、塾に遅れそうになった。走って家へ戻ると塾の鞆を掴み、犬小屋を見ないで家をまたとびだした。

塾から戻ってみると、家には誰もいなかった。

家中の明かりがつけっぱなしになっている。珍しい事だ。 庭の犬小屋を見ると、ワトソン君の姿も見えない。

「なんだ、散歩か」ぼくは少し安心した。散歩にしてはいつもと違うぞという心の声は押し殺した。

『ブルルルー。ブルルルー』と家の電話がなった。

「もしもし？」ぼくは電話に飛びついた。悪い予感がする。

「洋？」ママの声だ。「ワトソン君がいないのよ」受話器の向こうからママの心配そうな声がする。

「いないって？ どういう意味？」散歩の途中でいなくなったのだろうか。

「詳しくは家へ帰ってから話すから。夕食はちょっと待っててちょうだい」

ぼくは庭に面しているガラス戸を開けた。

そこにワトソン君が寝そべて、ぼくを見上げているはずだった。いつもなら……。



しばらくすると、ママが疲れた顔で帰って来た。  
「ワトソン君は？」ママの顔を見てすぐわかった。  
ワトソン君は見つからなかったのだ。  
ママは黙って食卓の椅子に座り、肘をついた。  
「ママが帰って来た時は、もうワトソン君はいなかったのよ」  
ぼくはドキッとした。  
「朝の散歩の後、繋ぎ忘れたのかな……」ぼくの責任だ。  
「自分ではずしたのかもしれないし、それは分からないけど、いなくなった事だけは確かだわ」  
ママはため息をついた。  
「明日から学校だから、ご飯が済んだら支度をして今日は早く寝なさいよ。ママは明日色々と探してみるから」  
そう言われても眠れそうもない。  
今、ワトソン君はどこで何をしているのだろう。  
車に轆かれていないよね？  
ぼくはこの時、名前を「ワトソン君」にしたことを後悔した。「ホームズ」にしておけばよかったと本気で思った。  
ホームズならきっとドジな事はしないだろう。ワトソンじゃ心配だ。



## ワトソン君はどこへ

---

朝になってもワトソン君は帰ってこなかった。

犬小屋を何回見ても、ワトソン君の姿はない。

今日は始業式だから学校へ行かなくてはいけない。ぼくは心配でしょうがなかったけど、仕方なく登校した。

式の後、急いで帰宅するとすぐワトソン君を探しに出かけた。

ママはあちこちに電話をかけている。

ワトソン君の消息を誰かしらないか、聞いているらしい。

いつも散歩する川沿いの道を、左右の草むらに注意しながら、ゆっくりと探した。

何か手がかりが落ちているかもしれない。

「何をしてるの？」と急に声をかけられて、ぼくは飛び上がった。

「そんなに驚かないでよ。こっちがびっくりするじゃない」と言ったのはエミさんだった。

マイクがぼくを見て鼻をこすりつけてきた。

「ワトソン君を探してるんだ」ぼくはマイクの頭をなでながら説明した。

「ワトソン君、どうかしたの？」エミさんが心配そうにぼくを見た。

「昨日からいないんだよ。家出したんだ」

ワトソン君はぼくの家がいやになったんだらうか。

「犬が家出？ まさか！」

「昨日の散歩の後、ちゃんと繋いでおかなかったから……」ぼくは口ごもった。

「たとえ外に出ても、普通は帰ってくるわよ」エミさんはしばらく黙って考えていた。

「野良犬と間違えられて捕まったら大変だわ。さあ、行きましょう」と突然ぼくを促した。

「行きましょうって、どこへさ？」ぼくはとまどって聞き返した。

「決まってるじゃない、君の家よ」

「ぼくんち？」

「そ、君の家。そこから始めないとね」

ぼくはエミさんが急に頼もしく思えた。

家に戻って主のいない犬小屋を見た時、ぼくの心臓がキュッと痛くなった。

マイクはしきりに犬小屋の臭いを嗅いでいる。

「まずどうやって庭を出たのかを見つけましょう」

エミさんは庭を見回した。

「ワトソン君が出ていける所はある？」

ぼくはしばらく考えた。

「周りは壁だから、やっぱり庭の木戸しかないよ」

「ということは、木戸が開いてたわけだ」エミさんにそう言われて、ぼくの心臓がまた少し痛んだ。

ぼくのせいだ。ワトソン君をちゃんと繋がなかったばかりでなく、木戸も開けっ放しだったんだ。

エミさんはそんなぼくの気持ちにはおかまいなく、マイクを連れて木戸から外へ出た。

「マイク、臭いがわかる？」

マイクはエミさんの言葉を理解したのか、鼻を地面にこすりつけ臭いをかいでいる。

やがて急に歩き始めたマイクの後に、ぼくらは従った。

最初に向かったのは、やはりいつも遊んでいる公園だった。

「やっぱり、ここに来たんだ」ぼくが呟くと、

「うん、君がここにいると思ったんだね」エミさんが頷きながら答えた。

ぼくの心臓はさっきから痛みっぱなしだ。

公園の中をひと回りすると、いつもの川沿いの道へとマイクが方向を変えた。

今度は迷う素振りを見せず、川にかかっている橋を渡り始めた。

「川向こうに行った事あるの？」エミさんがぼくを振り向いた。

「う〜ん。何回かあると思うよ。よく出会う犬の家もあるし」

「そこへ行ったのかもしれない。どの家かわかる？」

ぼくが案内するまでもなく、マイクが一軒の家の前で立ち止まった。

「この家だ！」ぼくが叫ぶと、エミさんは迷わずその家のチャイムを押した。

チャイムの鳴る音に反応したのか、家の中から「ワンワン」と犬の吠える声がした。

ドアが開いて顔を出したのは、シェルティーのナナとその飼い主のおばさんだ。

「ワトソン君のお兄ちゃんじゃないの。どうかしたの？」

ぼくは手短かにワトソン君がいなくなったこと、今マイクに頼んで探している事などを説明した。

おばさんはしばらく考えていた。

「あの犬がそうだったのかしら……」と首をかしげた。

「そういえば昨日の夕方、公園でナナを遊ばせている時、人なつこいビーグルがいてね」

「ワトソン君じゃなかった？」ぼくは勢い込んで聞いた。

「ワトソン君だったら分ると思うんだけどね」とおばさんは言いにくそうに続けた。

「あまりに汚れていたの、ワトソン君とは思わなかったのよ」

エミさんとぼくは顔を見合わせた。

「公園からずっとナナの後をついてきて帰ろうとしないのよ。こっちも困ってね。家に帰りなさいと言っても、ナナのそばから離れないのね。ナナも嫌がらなかったの、しばらく遊ばせておいたんだけど、夜になっても動かないので、仕方なく昨日の晩は玄関の中で繋いでおいたの」

家の中では、ママが外をいくら探してもいないわけだ。

「今もいるの？」

ぼくは期待を持って尋ねた。

「飼い主が現われないので、今朝交番に届けた所なの。ごめんね、ワトソン君だとは思わなかったから」

おばさんはすまなさそうにぼくの顔を見た。

「急いで交番に行った方がいいわね」

「おばさん、その交番どこですか？」エミさんが口を挟んだ。

「ワトソン君のお母さんに電話しましょう。おとなが行った方が早いと思うから」

「あ、ぼく携帯持っています」ぼくはお尻のポケットから携帯を取り出した。

お手柄だよ、マイク。

ぼくにはカエルをなめて腰を抜かしたマイクと、この家を探し当てたマイクとが同じ犬とはとうてい思えない。

## ワトソン君とホームズ君

---

しばらくすると、ママの運転する軽自動車が橋を渡ってくるのが見えた。

ママはエミさんとマイクを見ても少しも驚かない。

後部座席は狭いので、ママにそこへ押し込められたエミさんとマイクは窮屈そうだ。

ワトソン君を捕まえてくれたおばさんにお礼を言って、車で5分の所にある交番へと出発した。

ママとぼくは、交番のお巡りさんにワトソン君の行方を尋ねた。

「今朝、ここへ連れられて来たワトソン君のことなんですけど」ママが言う。

「ワトソン君？」お巡りさんがけけんそうなか顔をした。

「ここじゃありませんか？」ママは心配そうだ。

「ワトソン君って何です？」お巡りさんが聞き返した。

「うちのビーグルです！」ママの口調がきつくなる。ぼくにはママの頭に血がのぼっているのが分かった。

「うちの犬なんですけど」ぼくが口を挟んだ。

「犬ね、耳の垂れたやつね。今朝程保護しましたよ。犬なら最初から犬と言って下さいよ」お巡りさんは困惑気味だ。

「ここにいるんですか？」ママの口調はだんだんきつくなる。

「いや、ここには置いておけないので、署の方へ連れていきました」

「ショ？」ママが聞き返した。

「〇〇警察署です、管轄の」

「警察署なら最初からそう言ってちょうだい！」ママはますます頭に血がのぼっているらしい。

お巡りさんは苦い顔をした。

ママに任せておいたら話が進まないと思ったのかもしれない。

「〇〇警察署、知ってるかい？」と、お巡りさんはぼくの方を見た。

「知っています。大きな通りにある郵便局の隣でしょう？」

「そうそう、そこだよ。今日中に行かないと保護センターへ連れていかれると思うから、急いだ方がいい。署へは連絡を入れておくから」

ぼく達は親切なお巡りさんのいる交番を後にして、警察署に向かった。

〇〇警察署に到着すると、正面玄関で、ぼくとエミさんとマイクは車から降りた。ママは駐車場に車を置きに行っている。

「狭くてごめんね」

ワトソン君の為に窮屈な思いをさせて、ぼくはエミさんたちに悪いなと思った。

「大丈夫、私も心配だし、マイクもきっと同じだよ」

エミさんは優しい。

マイクが突然、リードを引っ張って歩き始めた。

かなり強く引いている。エミさんは小走りにマイクの後に従った。

ぼくはママが気になったが、マイクの後を追った。

マイクは玄関を通過すると、一目散に廊下を走り始めた。

「こらこら、そっちはだめだよ！」と叫ぶ声があるが、マイクは構わず走っていく。

エミさんはマイクに引きずられている。ぼくもマイクの後ろから追いかけた。

「まずいよ、マイク。ここは警察だぜ」と心の中で叫んでも、マイクには聞こえない。

すると、遠くで「ウォーン、ウォーン」と吠える声がある。

ワトソン君だ！

マイクの耳には、もっと前から聞こえていたのだろう。

とうとうエミさんは、リードを手から放した。

自由になったマイクは、あっという間に警察署の中庭を通過して、見えなくなった。

ぼく達はマイクの走り去った方向へと駆け出した。

2棟ある警察の建物を繋いでいる渡り廊下に、ワトソン君はいた。

柱のそばで「ウォーン、ウォーン」と吠えている。

ぼくの姿を見ると、ちぎれんばかりに尻尾を振った。

マイクがそばでワトソン君に鼻をこすりつけている。

「よかったね」エミさんがぼくを見てニコッと笑った。

渡り廊下の向こうから、警官とママが一緒にやってきた。

「警察では一日しか預かれないですよ。その後は動物保護センターに連れていくしかないんですからね。そこでは4日間しか置いてくれないですよ。逃げないようにしっかり管理して下さい」と警官に言われて、ママも神妙な顔をしている。

狭い自動車にぎゅうぎゅうになって乗り込み、ぼく達は無事家に帰った。

ワトソン君はのどが乾いたのか、早速水を飲みはじめた。

ぼくはマイクに「ホームズ」の名前をゆずることにした。

マイク、お前がこれから「ホームズ君」だ。

ぼくよりマイクの方が「ホームズ」の名にふさわしいものね。



終わり